

平成29年度
科学する心の育成をめざして



目次

P 1～はじめに

P 2～ なんで踏むの？命って？

P 3～「ゲゲゲゲゲゴゴゴッゴゴ」

P 7～烏骨鶏が……。元気ない……。

P 10～実際に飼育してわかること

P 13～ホンマに図鑑にのってる通りか調べたい

P 14～知りたい！調べる方法はたくさんある

P 15～冬眠？！

P 17～学びのつながり

P 19～一瞬一瞬をより豊かに

P 20～まとめ

手塚治虫 Osamu Tezuka

子供は、大人の真剣なメッセージを待っているし、
また十分に受け止める感受性もあります

The child is waiting for the earnest message of adult,
and there is the sensitivity to take enough again



●はじめに・・・

科学する心とは、どのように育まれるのだろうか。どのような瞬間をきっかけに、どのような積み重ねをして深まっていくのだろうか。知識、知能だけでなく、『心』というところに面白さと難しさと深みが幼児教育の醍醐味である。テスト前の一夜漬けの勉強と違い、『心』は時間をかけ、じんわりと染みこむように熟成され育っていく。

科学する心の育成は、子ども達の活動一つ一つに教師も子どももどれだけ想いを込めたか、その深みで価値が決まるように思う。単に活動を盛り込むだけでは、決して価値ある育ちにはならないことを子ども達は私達教師に教えてくれた。教師と子どもの信頼できる関係を基盤に、互いの活動にかける想いが、からまりあつて豊かな活動となり、子ども達の学びに近づくことを実践として記載した。

科学する心の育成は、**人として豊かに生きる学びの根幹を育んでいること**そして「**自然と向き合い小さな生き物、命、仲間とふれあうことを基盤に豊かな人へと成長してほしい**」という願いは平成25年度からの論文に記載の通り現在も変わっていない。しかし、保育の中でもっと当たり前のことが実践されていないことで子どもの姿に異変が起きる。それは、**子どもの思いをしっかりと聞くこと。子どもと本気で向き合うこと。子どもと信頼関係を深めながらいけない事をした時は共に考えつつ、いけないと伝えること。子どもの興味に合わせて環境構成と適切な援助を行い豊かな遊びを展開すること。**これは教育の基本中の基本である。園内でカンファレンスを重ね様々な検討をしたが子ども達の成長によりよい変化は見受けられにくかった時もあった。当たり前の教育が確立されていないと、科学する心の育成には到達しない。すなわち豊かな遊び・学びにはならないことを思い知らされた。教師という責任の重さも痛感した。担任という存在が子どもにとってどういうものなのかも考えさせられた。本論文は、科学する心がどのようなタイミングで育成されていくのかを探り実践を積み重ねた。平成28年度(園児)は、主に「命をどう感じていくのか」がサブテーマである。平成29年度(園児)は、「知りたい思いの実現」がサブテーマである。



H28・4～(5歳児)

私は5歳児の担任になった。子ども達の様子をしっかりと見て子ども達の実態を把握し、どのようにすれば少しでも豊かな経験となるのかを考える。何気なく子どもの姿が目に入った。…ある子が一人で地面を踏みつけている。(ん??なんだ??)と思い様子を見ていく。蟻を踏みつけているようだ。また別の場面にて…友達同士おしゃべりしている。するとまた別の子が地面に靴をこすりつけている。(ええ! 蟻を踏み潰している?!)すると一緒にしゃべっていた子も話を止めずに蟻をふみつけている。またまた別の場面にて…ダンゴムシが目に入った様子。手に取り様子を見ている。するとダンゴムシが体を丸めようとする反対の方向にダンゴムシの体を曲げてしまった。そして畑に投げた。

この姿はなんだろうか? 興味があつて生き物を触りすぎ死なせてしまう幼児期ならではの姿でもなく、踏んだりつぶしたりすることは習慣化しているようである。子ども時代は生き物を時に残酷にかかわってしまうことが必要な経験となることを十分に理解はできるが、これと今の姿は違うものであると思った。

5歳児4月に転入してきたA児:「なんでダンゴムシをつぶしちゃうの??」

周囲の子「……。う～ん。わからん。」

A児:「生きてるの知ってる?」 周囲の子「……。」

A児「生きてるものは、サクランボをとるみたいにふわって優しくさわってあげないとあかんねんで。つぶれちゃうねん。」

(つい先日、園内で栽培しているサクランボをみんなで収穫していただいたばかり)

周囲の子「そうなんや。」

クラス全体で話をする。

担任:「蟻をみたらみんなどうする?」 子ども:「踏みつける～」 担任「なんで踏むの??」

子ども「え?? 別に……。」 担任:「蟻がなんかしたん?」 子ども「してない。歩いてた。」

担任「蟻も生きてるねんで。命は一人でも一匹でも一つずつやねん。2つずつは絶対ない。だから一つしかない命を大切にしなかんねん。」 悩んだがこう伝えた。

A児:納得した表情で聞いている。「さくらんぼを取るみたいにふわつと生きてるものは触るねん。」

想像してる子、考えている子、なんのことかな?とキョトンとしている子等々。

子ども達が生き物や自然、仲間とふれあい自らの思いで「命」を感じてほしい。命の存在を感じた時、子ども達はきっと不思議や試行錯誤等々の学びの経験と積み重ねているであろう。教師の「命は大事」という言葉だけの受け売りになって欲しくないと思う。実感を伴う理解がなにより必要に思われ、幼稚園生活残り1年での心をゆさぶられるような毎日を共にどう創っていいのかと思った。

人は一緒にいる人に影響を受けて自然と似てくる。子ども達も同じである。子どもは、教師や友達の行動や心を肌にしみこむようにと模倣すると思う。又、いろいろな活動を進めても、そこに子ども達の思いがなければ価値のある活動とはならない。すれ違いの活動になってしまうように思う。子どもの思い、願い、そして環境構成、援助が適切であったのかがわかるバロメーターとして子どもの姿(成長・変容)がある。子ども達は何も言わないが、私達にメッセージを送っていると思う。教師はそのメッセージに気づくことができるのかが問われている。

小中学校の先生より意見交流

一見乱暴に見える子ども達の姿も、実は対象の生き物に興味がある表れなのかもしれない。又、世の中が昔と違い、蟻などの生き物をそつと外に出すのではなく、完全に排除する風潮もある。子ども達の思いをくみつつ適切な行動になるように教育の力と適切なかわりが必要である。⇒子どもの側面だけで決めつけてしまわないように適切なかわりと環境を考えつつ、園内でカンファレンスを重ね育ちにつながるようにしていく。

P2のような子ども達の実態をふまえ・・・科学する心の育成(豊かな経験・豊かな学び)のために特に気をつけたこと

- ・子どもの気持ちを心で受け止めていく
- ・子どもの発想を教師も前向きに一緒に面白がっていく(興味をもっていく)
- ・教師自身が発見、思考、試す等遊びを楽しむ
- ・子ども達の願いが実現できるようにゆったりと時間をとる
- ・ダメな事はダメときちんと伝え共に考えていく

- ・当たり前のことを当たり前大切にしよう
- ・カンファレンスで多面的に子どもをみよう
- ・活動だけでなく心を育てる

ゲゲゲゴゴゴゲロゲロ～

H28・5月下旬～(5歳児)

保育室にいたら、「ゲゲゲゴゴゴゲロゲロ～」(うまく文字で表現できません。)とすごい大きな声。

みんな:顔を見合わせ「ええ????何何??」

子ども:「外から声がする!!」

発見・驚き



みんなで一斉に外に面した扉にみんな一斉に向かう。

すると・・・ピタリ。声がやむ。みんな「え????????」

そこら辺りを探るが声はしない。子ども:「カエルの声に似てる。」

子ども:「やけど、あんなに大きな声って今までに聞いたことがないわ。」

B児:「わかった!!カエルが起きたんや。この前、土におった!」

しばらくして・・・

カエル:「ゲゲゲゲゲゲゴゴゴゴゴエゲゲ!!!」

みんな:「え???また怖い。なんか怖い。何何????」

今度はあわてて声のする方に行く。

子ども:「押すなよ!!!」「押してないし!!!」大声で言い合いになる。

するとまたピタリと声がやむ。

子ども:「大きな声出すからやん。ケンカしなや!」

声に反応している
ことがわかる

カエル:「ゲゲゲゲゲゲゴゴゴゴゴエゲゲ!!!」

みんな:顔を見合わせてキョトンとする。

子ども:「今度声したら、そつと行ってみる??」 みんな:「そうしよう!」

子ども:小さな声で「お前押すなよ!おまえが悪いんじや」「おまえこそ!」

と小競り合い。するとまたピタリと声がやむ。

子ども:「だからケンカしなや!小さい声でも声が止まるやん。」

みんな「ほんまにやめて!!!」 言い合いをした子は気まずそうにしている。

子ども:「いいこと考えた!窓からそつと覗こう」

みんな:「OK!!!」

カエル:「ゲゲゲゴゴゴゲゲゲ～」

みんなで、そつと窓に近づく。

カエル:「ゲゲゲゲゲゴゴゴゴゲゲゲ～」

みんな:「窓からやったら成功!!!やけど見えないわ～。」

発案・試す

エピソード

4月下旬、畑で土を掘り返していたら、カエルが出てきた。カエルはよろよろと逃げた。「え?寝てた?冬眠!」大笑い。



季節を感じる出来事



子ども:「よし! 声の方に近づけど! 見つからんように小さくなれ!」
と地面をはって近づこうとしたら...

疑問

またピタリと声がやむ。 子ども:「なんでばれるんや??」(見つかるの意味)
声をするたびにそ〜と近づくとテラスに出るとすぐに声がピタリと止む。
声をするたびに何度も挑戦するが、すべて失敗。



子ども:「この声絶対カエルや! ケンカしてるんちゃう?」
子ども:「なんでも聞こえるし、見えてるしカエルってすごいな。」
子ども:「僕もカエルと思う。ゲゲ言うてるし。池かな? 見てこよう。」

想像・比較

子ども:「これなに??」(カエルの卵を見つける)ルーペでのぞく。
子ども:「卵? カエルの??」
子ども:「この前見た本に同じの載ってるよ。」
子ども:「あれ? これは小さいオタマジャクシ??」
子ども:「この前見た本に同じの載ってるよ。」



「載ってる! カエルの卵や!」

教師は子ども達が活動を進めていく様子を見守る。
仲間の一員のように笑い、考え、子どもの発想を
共感的に聞いていく。結果としてその積み重ねが
豊かな生活を創っていくと考えた。



卵のはしっこを少し保育室で飼うことになった。

「これなんや? オタマジャクシ?」「卵みたい。カエルの卵?」
「え? いつのまに??」



(上の写真をズームしたもの)



子ども:「めだまみたい!」「まわりがゼリーみたい。」

数日たつと

A児:「細長くなってる!」「動いてる!!」 B児:だまって指を入れている
C児:「先生〜触ってる〜いいの?」 担任:「優しくさわってあげな死んじゃうよ。」
B児:指でつかまえようとしている。指で水をぐるり回し水流をつくる。 A児:「魚みたいや。」

顕微鏡の実物投影機で写してみる

子ども:「うわ〜ゆらゆらゆれてる〜おばけみたい。」
子ども:「これ生きてる?」(すると泳ぐ)
子ども:「生きてるな! ゾンビの顔や!」 子ども:「カエルはゾンビの子なんや〜」



数日後：魚のような形からオタマジャクシらしくなる。

F児：「見せて見せて～」 G児：「押すな！！」 押し問答になる。

オタマジャクシになる前の生き物の入ったプレートを一ひっくりかえす。

みんな「ああああ！！」

子どもなりの生き物を
大切にする態度

B児：「もう怒った！！」残った卵を池に返す。

残りの子は、ひっくりかえった生き物をみんな集めている。そして慌てて池に入れる。

後の話合いで・・・

B児：「池のほうが元気におおくなるからいいんや。だって触るし、こぼすし。」

G児：「おまえも触ってたやん。 B児：「うるさい！！」 まわりの子：「……。」

担任：「他の子はどうなん？」 H児：「カエルに元気になってほしい……。」

A児：「ぼくも同じです。」

担任：「ほんまやね。ただ言い合いになっちゃうな。池にかえすのも、じっくり見るのも
床に落ちたのを助けてあげるのもカエルになってほしいからやんね。

優しいなあ～オタマジャクシもよくけんかするクラスやな～って笑ってるわ。」

数日後：池をのぞけば、オタマジャクシが泳いでいる。うじゃうじゃ泳いでいる。

I児：「絵本みたいになるかな？？？楽しみ！！」 子ども：「こいつ足がはえてる～」

子ども：「こいつはオタマジャクシのようなカエルのような顔や」

子ども：「よ～し探検にいつこいつらを調べてくる。」そういつて、つかまえては、
居心地のいい場所で図鑑とオタマジャクシを調べたりしている。

そして「家に帰りや」とかえす。

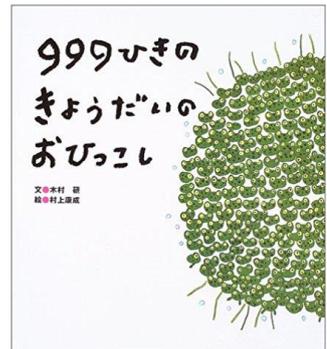
観察・探究心の芽生え

後に畑がカエルでいっぱいになる。

ふと目をやればカエルがあちらこちら自然に溶け込んでいる。

子ども：「カエル幼稚園になった～～」

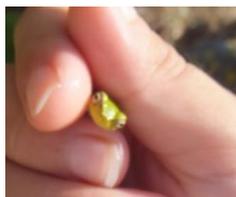
H児：「逃がしてあげてほんまによかったな。いっぱいカエルいてるわ。」



999ひきのきょうだいのおひっこし
文：木村研



ここはカエルの家や～



ここにもいっぱいいる



オタマジャクシをすくって
観察し、図鑑で調べている



トウモロコシの葉っぱにすっぽりと
はまっているカエル

いろいろなトラブルを日常にしながら、カエルの鳴き声をきっかけに活動を展開していく。
 カエルの生態がどうであるか、どんな変態をとげるのか等、今、目の前にいる子ども達にはあまり必要にないと思う。ただ生き物と触れ合い、仲間と一緒に、優しく純粋な滴のようなものを心にゆつくりと落としているようにも感じた。荒っぽさはあ
 るが、生き物のことを思い行動する姿にも変化を感じている。また、物事を見て、興味をもって知ろうとしている。
 子どもを自然がやさしく包んでくれているかのようにも思えてくる。
 幼児期に自然とふれあうことで、目には見えない大切なものを積み重ねている。
 気が付けば、蟻を踏み潰さなくなっている。蟻をみて「お！どこにいくのや？」と声をかけている。生き物に触れる際にもそつ
 と触れている。大切にしたい気持ちがきつと芽生えているのではと感じる。
 今、必要な経験のために、そして子どもの心を満たすためにじっくりと時間をとりたい。

5歳児修了までに育って欲しい10の姿より関連性

- ① 健康な心と身体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え⑥思考力の芽生え
- ⑦自然とのかかわり・生命尊重⑨言葉による伝え合い

小学校以降の学びのつながり

- 理科○自然にたしむこと ○自然を愛する心情を育てること
- ・身近な身の周りの観察(3年)・季節と生物(4年)・動物の誕生(5年)生物の観察(中1)
- 生活○具体的な活動や体験を通すこと ○自分自身や自分の生活について考えること
- 生活上必要な習慣や技能をみにつけること ○自立への基礎を養うこと

その後も、子ども達の思いに気付くように、穏やかに生活ができるように(トラブルを避ける意味ではない。)していく。
 時に、「直美先生は俺の事わかってくれてない。」と感情をぶつけて、気持ちがすれ違うなど、子ども同士のトラブルで一日
 が終わってしまうように感じた日も正直にあった。その都度、思いを聞いて誤解をとき、時に教師の間違いがあれば正直に謝
 るなど話をしっかりしてきた。いけないことはいけないと本気で伝えた。科学する心とは関連がないように思えるが、安定した生
 活が成立しないと、発見、気付き、思考、探究、観察等々は生まれてこない。

日々の様子

天井までのタワーにするぞ なんで葉に水が？



僕らの家はどこ?? 水を流せ～つなげろ～ アスパラってこんな風にできる



なんかおる!! カブトムシの対決! 根っこの戦い 地面の下はどうなってる?

一見、つながりがなくても一瞬一瞬を豊かに過ごすことが今は一番大切!!

烏骨鶏が……。元気ない……。

園内外でいろいろな生き物との触れ合う機会を意識してもつ。言葉で命は大事！というよりも、実際の生身の命ある生き物に触れ、本能で感じるほうに価値があり意味がある。4歳児の時から飼育当番はしていたが、5歳児になっても、うんこが臭いとか、嫌だ等言っていた。教師が率先して烏骨鶏やウサギとかかわり、触れて見せる。次第に当番をしていない子ども達の中からも、「掃除してあげな可哀想やわ！」と言う子もでてきた。又、いろいろと嫌といつも様子をじっくりと見る姿もでてきた。毎日ふれあうことで、何かを感じていくのではないかと当番活動は休まず続けた。少しずつ変化はある。ウサギを抱っこしてその温かみを感じる子も増えてきた。

平成28年11月～(5歳児)

子ども:「烏骨鶏さん卵産まなくなったね。お姉ちゃんが幼稚園の時は毎日産んでたよ。」

振り返り・想像

担任:「もう長いこと生きてるからかな？」子ども:「すっごいおばあちゃんってこと？」

担任:「そうやね～。」

そんな会話をした数日後、2羽のうち一羽の烏骨鶏が死んでしまった。

死と直面する機会

大騒ぎをして、園長先生などに知らせている。

子ども:「**可哀想**……。なんで死んだん??」

担任:「なんでかな?もう長いこと生きてたからかな？」

子ども:「長いこと生きたら死ぬの??」

園長先生:「命あるものは必ず死ぬんや。それは決まってることやねんで。」

子ども:「……。」

園長先生:「みんなに毎日世話をしてもらって喜んでたと思うで。」 子ども:「一匹になっちゃったな……。」

子ども:「烏骨鶏、一人じゃ寂しいやろな……ずっと一緒やったもんな。。。」

烏骨鶏の気持ちになる



次の日……。

烏骨鶏が寝床にしているカゴから動かない。

子ども:「どうしたんやろ……。病気かな?淋しいのかな??」

担任:「仲間がいなくなって烏骨鶏さんもショックなんかな?今日はそっとしてあげよう。」

子ども:「うんそうやな。」 (いつもはにぎやかに当番などをしているが、今日は烏骨鶏を気遣い静か邪魔にならないようにテキパキと掃除を終わらせている。)

子ども達も心配そうに烏骨鶏を覗き込み、声もかけずじつと様子を見ている。

優しさ・愛着

次の日……

子ども:「あれ?今日もカゴから動いてない。」

また次の日……

子ども:「今日も?? 先生、**烏骨鶏さん1個もうんこしてない。**」

子ども:「昨日は2,3個うんこしてたで。」

子ども:「ご飯、減ってない気がする。」 「あかんやん。」

園長先生:「ずっと2匹仲良く暮らしたから、1匹になったら、

残った1匹も死んでしまうこともよくある。」 子ども:「ええ!!それはあかん。どうしよう!!」

そう言って、飼育小屋をのぞき、小屋の中に入る。

子ども:「ご飯ちゃんと食べて。」 「元気だして。」

心配

生きるために必要なことを考えている

死を想像する

子ども達の感情を受け止めていく
教師も感情を表していく

烏骨鶏を思う気持ち

すると烏骨鶏が、むくりと起きて動き出す。子ども:「動いた～～」
担任:「みんなの気持ちが届くのちゃう??すごい～～。」
子ども:「水飲んで～～」と言って水入れを出すと烏骨鶏が水を一口飲んだ。
子ども:「飲んだ～～」「ご飯も食べて～～」

生きることは排泄すること

しかし、次の日も同じ。うんこは一つも落ちてない。

子ども:「あかんわ。うんこない。」 G児:「寂しいんやな。おまえ寂しいんか?」
自然と全員集まり、何かできることはないのか、どうしたら寂しくなくなるのかななどを相談している。

新たな発見

子ども:「そーや!!絵描いたげるわ!」

子ども:「ほら友達やで～～寂しくないように描いたから元気だせ!!」

絵を描いて烏骨鶏に見せている。周囲の友達も「僕も描く!」「私も!!」
「そっくりに描くわ。」 普段、かかわっている烏骨鶏も絵に表すと新たな発見があるようで、「あれ?こんなところブルーやった??」「足の模様キレイ。」
又、絵を描きながらも、烏骨鶏に声をかけ、友達同士「元気になってほしい。」
などと話をしている。

子ども達の提案で、飼育小屋の周りに、自分達が描いた烏骨鶏の絵を貼る事になった。

子ども:「烏骨鶏さんがベッドに寝て一番見えるところに貼りたい。」

子ども:「じゃあ、僕は上を見たら、見えるとこに貼るわ。」

等々、貼る場所や高さも調整している。

それから烏骨鶏は、エサを食べうんこも少ないながらもするようになった。

子ども:「よかった!うんこしてる。元気になってきてる。」

子ども:「よかった!!」

喜んだものも、つかの間、数日後、烏骨鶏は死んでしまった。

子ども:「…………。」「なんで…………。」

子ども:「ちょっと元気になったのに。」

命の終わり

子ども達の様子を見つつ、園長先生が、

「仲良しの烏骨鶏同士、また一緒におれるんちゃうか?」

時間は必要であったが、少しずつ烏骨鶏の死を受け入れている。

子ども:「そうか。空で会ってるかな?? そやけど寂しいな……。」

子ども:「死んでるのにおかしいけど、烏骨鶏さん元気でね。ありがとう。」



子ども達の優しさ、いたわりの気持ち、烏骨鶏への愛着等すべてを共感して受け止めとめていく。
生き物を大切にする気持ちへの成長を子ども達自身も感じ取れるように伝えていく。

・4月頃のアリを踏み潰したり、カエルを投げたりする姿から、このように鳥骨鶏のことを想い行動している。

鳥骨鶏の命を感じ、生きるということは食事をし、排せつをすることを鳥骨鶏の姿から確かめている。鳥骨鶏の変化を見逃さず気がつき、他に気がそれず友達と意思をつなげている。鳥骨鶏の死は悲しい出来事であったが、子ども達の気持ちからのと行動と成長がなにより嬉しかった。命を感じて行動する姿に、今日までの積み重ねの日々に意味があったと感じた。科学する心を育成する要因は、子ども自身の心が安定し周囲の変化に気付く心のゆとりがあることやその対象物と生活を共にすると言えらるほど、同じ時間を共有し愛着をもつことから始まると思った。

又、科学する心を育もうとする時には、物事をしっかりと見ようと、考えることなどで集中力が育まれていくことをあらためて感じた。この小さな小さな積み重ねの成長を大切に後の活動の基盤としたい。

・鳥骨鶏の寿命を考え、動物病院等の専門家に頼ることはしなかったが、子どもにとれば専門家に掛かる経験や話なども十分価値があったのではと思う。

5歳児修了までに育って欲しい10の姿より関連性

- ②自立心 ③協同性 ⑥思考力の芽生え⑦自然とのかかわり・生命尊重⑨言葉による伝え合い
⑧豊かな感性と表現

小学校以降の学びのつながり

理科 ○自然を愛する心情を育てること ○自然の事物・現象について実感の伴った理解を図ること
・身近な身の周りの観察(3年)・生物と環境(6年)生物の観察(中1年)

生活科 ○具体的な活動や体験を通すこと

○自分自身や自分の生活について考えること ○自立への基礎を養うこと

小中学校の先生と意見交流より

・蟻をふみつけて何も感じない姿から(何も感じないように見える姿)、鳥骨鶏の命を感じ、愛おしむようになった子ども達にどんな日々があったのかと想像している。何がそうさせたのか?どんなしかけがあったのか?きっと、子どもの思いを存分にくみ、教師の思いを重ねあわせて保育を展開させた積み重ねだろうと思う。科学する心の育成は一人一人がいきいきと活動しそして集団になっていく。すなわち「仲間づくり・集団づくり」なんだろうと思った。

・蟻をふみつける。ダンゴムシをまげる等の姿も、興味があるからの行動であると思う。そこから適切なかかわり方を幼稚園の日々で学んでいったのではないかな?

・一クラスの人数が少ないメリットがでている。これが35人のクラスなら、このようにゆったりと死を向き合えただろうか?一人一人の行動・発言・影響力がその分大きいことも想像できる。少人数だからよけいに死を自分事のように向き合えたのではないかな。

・一見科学とは関連のないように思われる実践も、子どもの興味関心を指導者がキャッチして、小さな興味を探究する心へと引きだしている。やりたい!知りたい!がすべての学びの基礎である。それこそが科学する心の育成なのだと思う。

⇒科学的なことは、決して理科だけではない。すべてが学びであり、心の育成であることを、小中学校の先生のご意見から再確認できた。今後も子ども達の思いを探り研究を深めていきたい。

赤字 = きっかけやポイントとなる言葉

⇒ 小中学校の先生方のご意見を聞いた後に園として考えていることを記載

➡ 教師の援助

平成29年度も5歳児の担任になった。今年の子ども達は、幼さも残り、ファンタジーの中で過ごしているかのようにも感じた。どんな子ども達の個性でも、幼稚園が大好きで、先生のことが大好きなら豊かな活動を展開できる。子ども達の興味を探りながらのスタートとなった。

実際に飼育してわかること・・・青虫の幼虫

蝶になるって本当かな？ 幼虫を飼う

H29・5 (5歳児)

幼稚園のミカンの木に幼虫がいた。興味があるもののその色からか、誰も触れようとしなかった。樹木消毒の対象の木となっていて教師が青虫を救出した。

想像と期待

子ども:「先生、この幼虫どうしたん？」

担任:「ミカンの木を消毒することになって幼虫が消毒かかったら死んでしまうから助けてん。」

子ども:「へ～～先生これどうするの??」

担任:「また消毒されたら死んじゃうから飼ってみようかな～。」

子ども:「蝶になるんやろ?? A君が言った。飼ってみたい」

担任:「途中でほったらかしたらあかんよ。お世話してあげてな。」



図鑑と違うことがあることへの驚き

ガラスの小瓶にミカンの葉つき枝をさし、選んだ幼虫をのせて様子を見ることにした。

中には名前をつけて飼育する子もいる。

子ども:「入れ物に入れたほうがいいんちゃう?? 図鑑に載ってる～」

担任:「枝ごと花瓶にさしてるけど全然逃げないよ。ずっと枝にいてる。」

逃げないならOKとし、ケースなしで飼育。瓶の水も替え毎日様子をしっかりと見ている。

図鑑と違うことがあることに大変驚いていた。



このページをよく見えています



図鑑と現実の比較

幼虫さんの引っ越し?!

子ども:「ラブ(つけた名前)おはよ元気か～～」

ところが、数日後

子ども:「あれ?? いない?」「あれ? こっちは幼虫が増えてる??」

幼虫が引っ越しをしたようである。

子ども:「すみません～うちの子がお邪魔して」

子ども:「いえいえ～～遊んでいって～」

擬人化してやりとりを楽しむ。

このように日々様子を見て世話をしていた。



幼虫の色が緑色に・・・そして臭い攻撃!!

そのうち、黒色の幼虫が、緑色になる。

子ども:「あれ?? 緑になってる!! 確か・・・本の通り。」

図鑑と現実を見比べている。

今年の子どもは、図鑑をよく見て見比べることが好きである。

幼虫に限らず、いつでも図鑑と見比べている。

じっくりと見ようと緑幼虫によっていく。すると子ども「うわ！！臭い！！なんかツノ出した！！」

子ども：「図鑑にも書いてた。くっさ～先生も匂ってみて～」

担任：「勇気いるわ……くっさ～！！」大爆笑

子ども：「怒ったらツノ出すみたい！！」

子ども：面白がって、いろいろな先生を呼んで「匂って～」と誘っている。

毎日何度も幼虫を怒らせているうちに怒らなくなる。

R児：「ぼくの幼虫、ぼくのことわかってるんやわ。全然怒らないよ。」

それぞれの個体差等違いも、自分達のように擬人化的に考えている。

幼虫のうんこ

週明け

子ども：「うわ～～うんこスゴイ量やな。だんだん増えてる。」

トレーの掃除をするたびに、カラカラカラ～～と乾いたいい音がする。

トレーをゆすって遊ぶ。

音・新たな遊びへ

幼虫が大きくなるせいか、うんこの量も毎日すごい。

子ども：「うんこ多すぎやな。」

子ども：「見て～～葉っぱもうない。」「いいこと考えた！」

そうやってうんこを集めてカップにいれてマラカスにした。

カラカラ～シャラシャラ～と乾いた優しい音がする。

子ども：「最初からうんこ、貯めていたらすごい量やったやろな～今までほってたの(捨てる)もったいなかったわ。」

卵と秘密の場所

発見・図鑑との比較

幼虫の餌用の葉にいた卵を見つける。

子ども：「これって卵やん。黒色やからもうすぐ生まれるよ。」

図鑑をみて卵の色の変化で卵の羽化に近づくことを友達と確認している。よくよく見たら黄色の卵もついている。

S児：「先生！秘密の場所教えてるか。」こっそり私を裏に連れて行った。

S児：「ほらこれキンカンの木やねん。いっぱい卵ついでる。」

担任：「わ～～本当や！よく見つけたね。どうやってわかったん？」

S児：「すごいやろ。ぼくの家にも木あるねん。いっぱい卵いってるから。時々見に行ったら卵の色が変わるの見てる～黒色の幼虫もいってるで。」

S児：「やっぱりみんなに教えようかな～～」

そうやって友達に紹介して、ちよくちよく様子を見に行っている。

同じもの・同類のもの

S児は家にある木で卵を集めたり、興味をもって様子を見たりしていることが日々の会話でわかる。

保護者からも、「今までは、葉を食べつくす害虫として卵をつぶしていました。今は子どもが大切にしています。」等々。

S児は園での経験と、家庭での経験を循環して学びを重ねている。

経験と学びの連続性
園⇔家庭



うんこマラカス

卵を確認中



あれ？きょうのラブ(幼虫)は下痢！！

変化に気付く力



K児:「あれ???ラブ(自分の飼っている幼虫)下痢してる。」

Y児:「風邪ちゃう???」

幼虫がなんでかどっかいくねん。

R児:「何回もぼくの幼虫がどっかに行こうとするねん。何回も元に戻すんやけど…。I君のもやねん。」

I児:「どっかいきんたのかな?さっきから机の下に行ったりしてる。」

R児I児:「僕ら2時3時(課業後保育)行かなあかんから、直美先生見てほしい〜。」

そういつてまた自分達の瓶のところに幼虫を戻した。

R児とI児の幼虫の動きをその日の仕事終わりの夕方まで観察していたら机の上やら下やら本棚、扉と移動している。そしてロッカーのところでじっとして動かなくなった。

下痢のような便のことが後に図鑑から蝶になる前に下痢のような便になるということがわかる。



幼虫がいない!!これ蛹?顔が取れている

変態・想像・期待

次の日「ぼくの幼虫どうなった??」

担任:「ロッカーのところでじっとしてたから…きっとこの子。」

子ども:「蛹??」「顔とれてる…。」

子ども:「うわ〜コップ入れるかごにもついてる…。顔も落ちてる〜」

R児:「蛹になるとどっかいくのかな??」

部屋中を探すとあちらこちらに蛹になっている。

子ども:「蝶の幼稚園になるわ〜」

糸でしっかり体を固定している蛹の真似をして体で表現して遊んでいる。

その後幼虫が次々と蛹になっていく。中にはロッカーの中にも蛹になり

R児:「僕のロッカー蛹に貸してるねん。」

蛹がより身近に見られるように環境をつくる



蛹が糸でつらさがっている様子



蛹から蝶へ

自然のありのままの美しさ

数日後、朝登園したら、「蝶になってる!アゲハ蝶や〜キレイ」「いろいろな色がある〜」羽を広げている「きっと羽を乾かしてるねんで。」「逃げないね。」「みんなでうっとり見て、絵画に表現した。

絵画にすることでよりじっくりと見て、色、形、様子、質感など再発見している。

え?おしっこ??

部屋中に蛹ができて、毎日アゲハが羽化していた。羽化の様子が見たいという子どもの願いを定点カメラを設置して撮影していた。全員でビデオ視聴。羽化の瞬間がばっちり撮影されていた。

蛹が蝶になろうとして…蛹の中に、まるでコップに水をそそぐようにしや〜〜〜という音がするかのよう蝶が液体を出した。子ども:「え?おしっこ??」VTRを再生し直す。

子ども:「うわ〜〜なにこれ??おしっこやろ?」

「下痢のうんこやで。私のラブ(幼虫)も下痢してたで。」

新たな発見・驚き

本物の蛹を確認しに行く。

他の蛹の中にも同じ液体が入っていることをみんなで確認している。

子どもが、蛹を取り、皿に蛹をひっくり返し液体を出す。



ちょっとどろっとした感じである。 子ども:「くっさ〜！！」「不思議すぎる匂い！！」
「えええ！！おしっこやん！」 「下痢ちゃう??」

どの蛹にも液体(蛹便)はあることをその後も確認して子ども達の中では、蝶になる時に
でる臭いおしっこのようなものということになっている。

その後、畑や園庭のあちらこちらに飛ぶアゲハ蝶をみては「おかえり〜」とか
「やっほ〜」とか声をかけたり眺めたりしている。



色・匂いを確認しています



匂いで(五感)確認する



どの蝶もおしっこ(蛹便)だしていることを知る

感動は表現につながる 幼虫から蝶へ

アゲハの幼虫の飼育から、日々観察、世話をして様々な気づきがあった。最初はちょっと怖いと思いながらも飼育していた子も愛着の気持ちから大切にかかわる。毎日の観察から、個々に気付いたことを周囲の友達に知らせ、また確認して確かめる。そんなサイクルの積み重ねがあった。

図鑑と現実の比較もよくしていた。図鑑では調べていろいろ知っていたが、実際に経験すると感動は比較にならないものであることを子ども達の姿が物語っていた。

児修了までに育てて欲しい10の姿より関連性

- ① 健康な心と身体 ②自立心 ③協同性 ④思考力の芽生え
- ⑦自然とのかかわり・生命尊重⑨言葉による伝え合い⑩豊かな感性と表現

小学校以降の学びのつながり

理科○自然に親しむこと○自然の事物・現象についての実感の伴った理解を図ること

- 自然を愛する心情を育てること 昆虫と植物・身近な身の周りの観察(3年)
- ・動物の誕生(5年)生物の観察(中1年)

生活科○具体的な活動や体験を通すこと

- 自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもつこと
- 自立への基礎を養うこと



「ホンマに図鑑にのってる通りか調べたい！」

平成29年7月～(5歳児) D児とS児

カタツムリのうんこが食べたものになるという図鑑の記載をみて
カタツムリのうんこを集め食べたものと同じ色なのかを調べている。

カタツムリにキュウリをあげた。(子どもの予想はきっと緑色)

ところが、次の日、黒色に近いうんこの子色。

子ども:「あれ?なんか黒い・・・。」げげんな顔。

そういってお皿にとっておいておく。

仮説を試す



気になったのか、後に石でつぶす。すると青のりのようになる。 D児：「やっぱり緑やん～！」 すっきりとした表情になる。赤いトマトをたべさせて赤いうんこ。人参をたべさせてオレンジのうんこなどと確かめていた。

蝶の羽化の経験より、子ども達は図鑑にのっていること、知ってるいると思っていたことが違うのかもしれないと感じはじめた。そして自分で調べて自分で確かめたいと思ったのではないか。クラスの雰囲気として、教師がどんな意見にでも肯定的にとらえることで思ったことを素直に出せるようになってきた。子ども達は「いいこと考えた！」と「研究しよう！！」が口癖になっていた。

知りたい！！調べる方法はたくさんある。

平成29年7月(5歳児)

夏の集いに教師の出し物で、変色の実験をした。

レモンの代わりにビタミンパウダーを使う。

子ども達は、魔法の粉と称し、「買ったの？つくったの？」と興味津々。

いろいろな色水を作っては、「魔法の粉をください。」と変色するかを調べている。

ヒントもたくさん出して赤紫蘇とアサガオの変色実験、赤紫蘇ジュースも作った。

教師：「実はこの粉はビタミンC。レモンの代わりに使っていました。」

子ども：「作れる？**どうやってつくるん？**パソコンでしらべる？？」

K児：「**きっとレモンの汁を乾かしてから固めるんちゃう？**？」

教師：「先生も知らないねん。……。つくれるのかな？？」

教師もむくむくと子どもに疑問に知りたくなる

再現してみたい気持ち

教師：「よし！このビタミンCの会社に電話をしよう。」

作戦会議をして、失礼のないように…子どもがドキドキしながら電話をする。

すると、丁寧に電話で教えてくれた。

担当者の方：「**ビタミンCは、レモンからできていません。トウモロコシからできています。**

作り方は、機械がいるから幼稚園ではちょっと無理かな。」等々。

子ども：「え？？？トウモロコシ？？昨日全部たべちゃったやん。(畑で育てていた)」

子ども：「不思議すぎ！」

担当者：「水で薄めておいしく頂いてくださいね。」子ども：「ビタミンCってどんなの？？飲みたい……。」

みんなでいただく。「ビタミンC 爽やか～～」

後に会社の方がいろいろな商品を送って下さった。

新たな調べ方



今回の出来事は、子どもの願いは再現できなかったが、子どもと共に不思議な気持ちがいっぱいになり面白かった。普段から、知りたいことがあれば、保育室の図鑑⇒絵本の部屋⇒職員室のパソコンか小学校の先生そして今回、専門家(今回は会社の担当者)に聞くという経験ができた。

子ども達は4月から、知りたいことを心にうずめてしまわず、引け目なく表現するようになってきた。

知りたいことが叶い、友達と共通の思いで理解することで、意欲的になり、今後、なにかに関連付けていこうと思われる。

子ども達の自分達の目で確かめたいという気持ちをどんどん引き出していきたい。

冬眠??!

平成29年4月～(5歳児)

去年度の5歳児が卒園の際に「生き物のお世話をよろしくね。」と言われたことを意識して、毎日掃除をしたり、興味深く様子を見たりする。4歳児に時にも隣の部屋から去年の5歳児が掃除などを行っている姿を見ていたが、4歳児の頃はザリガニに興味はあるが怖くてつかめなかった。又、「ザリガニのお世話はそら組になったら(5歳児)!!」と去年の5歳児に言われたことが、ザリガニに対して余計に興味をそそり、憧れたのであろう。

A児:「このザリガニ、どこでつかまえたん?」

担任:「木谷さんの畑で釣ったんよ。みんなも一緒に釣ったやん。忘れた??」(4歳児5歳児共にザリガニ釣りを経験)

B児:「覚えてる!!ぼくらは全然釣れなかってん。」担任:「え!そうやったん!」

C児:「前のそら組さんいっぱい釣れたん?」担任:「いっぱい釣ってたよ。」

D児:「ええなあ～～～」

A児:「また木谷さんの畑にザリガニ釣りに行きたい!!今日行きたい!!」

担任:「今日??木谷さんいてるかな?園長先生に電話して聞いてもらう??」

子ども達:「やった!!!」

子ども達は園長先生にお願いして連絡を取ってもらおう。

そして、図鑑でザリガニの釣り方を調べている。

自分の手でつってみたい



4/21 数日後、ザリガニ釣りに木谷さんの畑に行く。

木谷さん:「来たんか?ザリガニ釣りはまだ早いで～～」子ども達:「??????」

木谷さん:「まあ何事も経験やな。ゆっくりしていつて!」

子ども達:あぜをのぞきこんで、「あ!!!いてる!!!ハサミの赤色見える!!!」

「木谷さん早いつて言ってたけど、ザリガニいてるやん!やった～～～!!!」

さっさと用意をして糸をたらす。期待がふくらむ。

子ども達:「あれ???イカ食べへんで。」「ザリガニ動けへん。」「そこに見えてるのに!!!」

「エサを間違えたんちゃう??」「寝てるんちゃう?違うザリガニ探してくる!」

「おった～～～!!!」よくみたら結構いてる。赤いツメや姿が見える。

木谷さん:「釣れたか～～～?」子ども達:「釣れてない……。」

木谷さん:「早いつて言ったやろ!まだ暑くないから寝てるんやで。」

子ども達:「え????」

その時、ある子が、足をすべらせて畑の土がそがれた。すると……A児:「先生!・なんか……いてる……。へび??」

担任:「ん?」よ～く見たらその生き物はうねうねしている。「え????」

A児:「え?ドジョウ??なんで土から??え?寝てたん??」 「土の中で寝てたみたい。起こしちゃったわ。」

子ども達:「冬眠や。」「もう春だよ～～～起きてや～～。まだ冬なん?」

こども:「春やで!そら組になったら(5歳児になったら)春やもん。」

結局、その日にザリガニは自分達では一匹も釣れず、とぼとぼと園に帰った。

B児:「もう春やのに、まだ寝てるってどういこと。寝坊や!!!」C児:「もっと暑くならなあかんの???」

A児:「暑くなったらまた行きたい!!どんだけ暑くなったらいいのかな?」

D児:「これこれ!!(温度計)これでどれくらい??」

担任:「う～ん!!今より上やな。上にいくほど熱いねん。」

子ども達は、温度計を覗いたり、図鑑をみたりしてザリガニ釣りを楽しみにしている。

季節の移り変わりを探る



5/30 木谷さんからジャガイモ堀りの誘いを受ける

子ども達:「ザリガニも釣らせてもらおう!!もうだいぶ暑い!」

「暑くないで。まだちゃう??今度こそ“!!!」

気持ちは ジャガイモ<ザリガニ釣り である。



木谷さん:「暑くなってきたからザリガニがいてるぞ~~」 「ほんまかな??」

ザリガニがどんな動きをするのか、どこまで食べたら釣れるのかを時間をかけて体得していた。

子ども:「きょうはしっかりご飯たべてくれたから釣れた!!」



実体験から体感する

土で眠るドジョウを実際に見る経験はなかなかできないだろうと思い、地域の方のあたたかい御好意に心から感謝した。人生の先輩からでる醸し出す雰囲気と優しさを感じ、子どもだけでなく、教師の私もすっかり木谷さんのもつ人間の器の大きさに魅了されている。そして畑では、四季折々の自然があり、心が浄化して優しくなる。木谷さんの畑はなんとも不思議な場である。

今回は、ザリガニやドジョウを通して、めぐる季節を体感した。

又、実際にザリガニを釣り、想像よりも引きが強いことや、どこまでエサを食べたら水からあげるのか、どんな所にザリガニが多くいるのかを知ることができた。

年間通して、またお邪魔させてもらい、学びの場にしたい。



小中学校の先生達より意見交流

・子ども達が先生と共に自由な発想で知りたいことを表現し試していることが興味深い。

季節を感じる経験は、この時代に大変貴重である。

・子ども達の仮説⇒実際の出来事⇒試す⇒仮説が正しいと知るというサイクルはまさに科学的思考の基本であると思う。

興味のあることを通して、知りたい欲求を、実体験で試し確証を得ることを存分に経験できていると思う。

・調べる方法を幼稚園の子どもがこのように知っているとは驚きである。それだけ興味があり、知りたい欲求が強いからできるプロセスであるのではないか。小学校以降の調べ学習等にも関連がある。

知りたい→試行錯誤して調べる→わかり→また新たな疑問がでてくる

そのプロセスはまさに学びの基礎そのものである。

・きっと教師は、子どもの発想を「面白そう!知りたい!」と 共感し、教育的価値を付加しているからこのような姿になったのだろう。

質問…子どもの最初の知りたい要求を聞いて、その先の活動をどこまで、幼稚園の教師は見通しているのか?

最初からゴールを決めているのか?

幼稚園側より…子どもの知りたい要求を聞いて、どんな可能性があるのか、どんな展開ができるのかは教師のプランとして心の中たくさんに持っています。しかし、子ども達がどう展開していくのかは未知数なので子どもの要求、実態に合いわせていきます。子ども達に必要と思えば、子ども達からの要求がなくても教師から提案することもあります。

ゴールを決めているというよりは、展開しつつ子どもの興味にあわせ探り探りで考えているという感覚です。

⇒子どもの興味と学んでほしい教育的価値をうまく循環していくことで、学びは深まる。

なにより教師も子どもと共に知りたい!面白い!!と心から思うことにつくる。子どもは肌でそれを感じているのである。

これからもカンファレンスや教材研究を深めながら、子どもの経験をより豊かなものにしていく。

幼稚園の教師をしていたら、卒園した子ども達がどのような学校生活を送り、園でしてきたことが生活や学習の本当に基盤となっているのかが一番気になる。いつも**子どもの姿が答え**なのである。学習への意欲・観察力・集中力・表現力等々は学校の生活ではどうなのか？時間のあるときにふらりと学校をのぞきにいき子ども達の様子を参観する。先生達と子どもの様子を交流する。学習や保護者対応のアドバイスをし合うこともよくある。それらはずっと行ってきた。本園を含む地域、富田林第一中学校校区は職員の連携が頻繁で思ったことを遠慮なく言い合える人間関係がある。どの職員も学びや経験は幼・小・中とそれぞれに切れてしまわないで連続していることを実感し、そして子ども達のよりよい成長をどの職員も望んでいるからこそ連携が深まるのである。

卒園した子ども達はふらりと幼稚園にやってくる。「懐かしい〜」「ここでドロドロになったな〜」「野菜めっちゃおいしかったん憶えてる。」「直美先生にすごい怖い顔で怒られた。あれは忘れられへん。」「幼稚園に帰ってきたいな〜」等々。

学びが繋がっていると感じた一例を紹介します。

Y児・弟が本年度の5歳児に在籍しているのでよくやってくる。

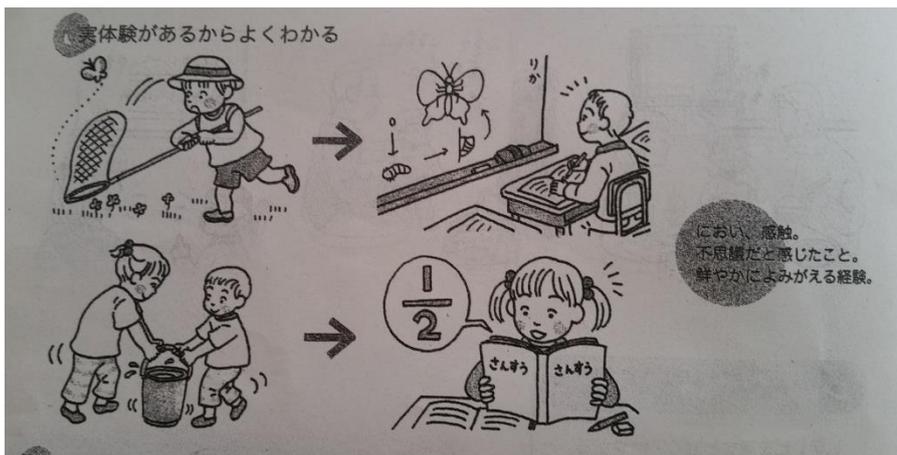
「先生 今学校で勉強してるの教えたるか？」「うん！！知りたい！」そうってランドセルから理科の教科書を出した。理科3年生モンシロチョウの羽化の学習……「**これ幼稚園でいっぱいしたやろ。だから大好きやねん。みんなで蝶を逃がしたの覚えてる。**」(平成25年度のソニーの論文に掲載の学年の子である。蝶の羽化の実践は論文には掲載していません。)

そして理科のテストも見せてくれた。「○ばっかりやん！！」「簡単！！幼稚園でやったことばっかりやで。」

「これもやった。温度(日なたと日陰)調べて……タライをお風呂にしたなあ。ホースからめっちゃくちゃ熱いお湯でできた。」「そやったな〜毎日楽しかったね。(教師)」「R君が一番温度を高くできたの俺憶えてるもん。」「そやったそやった！！」懐かしい話。(平成25年度 論文参照)

母親から……「先生やっぱり経験ってすごいですね。**幼稚園で経験したことが今学校の学習に活かされています。**温度とか蝶の羽化とか、生き物に対する愛着とか……全部幼稚園で遊んだことです。**楽しかったことが学習に意欲になってる**から勉強を楽しくできています。ここだけの話、幼稚園でやった温度とか蝶の羽化とかそのあたりのテストの点すごくいいんですよ！！やっぱり経験ですね〜」

そうって他の保護者にも、「いろいろな経験させてもらった。枝豆大豆から豆腐つくったり、きな粉作って失敗したり、梅干しつくったり……どろどろになったり……こっちがびっくりするような経験しはるねん。」



Y児の担任の先生にメモを頂きましたので掲載します

理科の授業について

- ・生物について非常に興味関心が高く、昆虫や爬虫類などのからだの仕組みにとっても詳しい。

→羽が何枚あるか、足が何本あるか、体が頭・胸・腹の三つに分かれていることなど

- ・モンシロチョウの羽化では、アオムシを飼う際の紙の湿らせ方や外へ放つまでに羽を乾かさなければならないことなどを学級に説明。すべての班で羽化が成功した。
- ・普段の授業でも理科の時間は積極的に発言し、班のリーダーとして活躍。水や磁石を使った実験の方法も教科書を読んですぐに理解し、実験から結果へのプロセスやなぜそのような結果になるかについての理解も早かった。
- 磁石や電流のしくみ（S極とN極が引き合うことや、電気を通す物質と磁石につく物質の違いなど）も良く理解していた。

生き物係について

- ・動植物に興味が多く、様々な生物の生態について調べ、学級でも多くの動物を飼っていた。（カナヘビ、昆虫類、ザリガニ、カエル、カメ）ザリガニの産卵が成功した際、他のザリガニと水槽を分ける必要があるという提案や水を替える頻度がどのくらいかなど、Yが他の児童に指示していた。

これらの動物たちを学級に連れてきたのはYとその友人であり、これによって、本学級では多くの生物の命や成長に触れることができた。産卵や羽化など感動的な場面に出会うこともあり、それまで虫や爬虫類を嫌っていた児童も生き物と積極的に関わるようになった。

Y児の担任の先生より

・いきいきと授業に参加して積極的に行動・発言をしていた。

Y児の興味がクラスへ広がって、教室は生き物でいっぱいになった。身近に生き物を見て興味が湧く子どもも多かったです。等々教えてくださいました。

反省・今後の展開

今まで漠然と学びのつながりが知りたいと小中学校の先生と話をしていたが、小学校以降の生活全般の意欲等に加え、子ども達が経験したことを単元で学ぶ際に本園を卒園した子ども達がどのように学ぶか、ポイントをしばって教えてもらうとよりわかるのではと思った。タイミングを逃さず授業の様子を参観して学びがどういかにされているかをこの目で見て探りたい。

例 平成27年度卒園児
蝶の羽化を経験→3年昆虫と植物
宇宙→4年・6年 月と星 月と太陽

環境構成の工夫



子どもの目線に合わせた高さ



特徴がよく見えるように



いつでも見たくなる環境



匂いなどよりリアルに



ある日の保育室 子ども達が大切に飼育しています



たくさんの幼虫がいたよ



図鑑と本物の比較



水が踊ってる～



うさぎのうーちゃん



カマキリの赤ちゃん見つけた！



海の世界にお邪魔します



光りの差す方に豆苗が！
ひっくりかえすとどうなるか？



13人全員で一輪車にのれるようになりました



小学校の先生の出前授業
数の遊び

平成29年度5歳児



タライ船でプールの真ん中の
アメロボをつかまえる！！



うーちゃんが病気に
薬をのませています



ヒルをつかまえた！
ヒルの為にドジョウ捕獲作戦



うんこ長い～～～



僕らが育てたひまわりトンネル



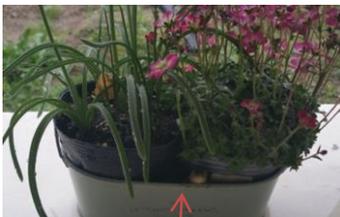
第一号が咲きました！



負けるな！！



小学校理科実験室
生き物の標本・魚のお腹の中～



4年のお付き合いのカエルさん

毎年、春になったら帰ってきます。雨の日にはどこかにいって、晴れたら帰ってきます。冬になればなくなります。今春もひょっこり顔をだしてびっくりさせてくれました。

おわりに…

教師という仕事は、瞬間 瞬間の判断の連続である。その一瞬を切り取りどう判断するのか。どう展開していくのかに尽きる。豊かな活動を展開できる要素は、人間性と専門性とちよつとした遊び心の融合である。

そしてすべてののはじまりは、「自分の思いを受け入れてくれる人がいる」ということである。

人間って不思議な生き物だと思う。自分の考えを「うんうん！！面白い！！」と受け入れてくれると、次々にアイデアを出していくのである。逆に言えば 考えに否定的であると、次のアイデアが出ても伝えずに心に秘めてしまう。又はクリエイティブにアイデアが浮かびにくくなる。それは教師も子どもも同じである。

平成28年度5歳児…「命をどう感じていくのか」 に関しては、子どもの思いをしっかりと受け止めていくことと同時にしてはいけないことをきちんとつたえていくことのバランスを大切にしたい。生き物に愛着が湧くと仲間の一員として大切に受け入れていくことがわかった。子ども達の素直な気持ちや優しさから、変化変容をみいだすことができた。

平成29年度5歳児 「知りたい思いの実現」に関しては、子どもが物怖じせず「やりたい！知りたい！」と言えるような人間関係を基盤に活動を展開した。

どの事例も5歳児のものであるが、園内のカンファレンスや小中学校の先生方のご意見は大変ありがたく貴重である。園児数減少に伴い、一人一人の存在が大きく、活動も左右されるが、少人数ならではの良さを最大限にいかした保育を今後も展開していきたい。

去年度論文掲載の課題、展開について

* 園内の実践の共有化・実践を深めること・組織としての展開について…

⇒カンファレンスや日常の職員室トークにて意見交流はしてきた。共有化はされてきたが実践の深まりまではいかず。地道にカンファレンスを今後も続けていきたい。

* 小中学校の先生と共に科学する心の育成をテーマに研究を深める…

⇒日々の活動や子どもの姿の連携や話し合いは行っているものの 科学する心の育成のテーマまでたどり着かず。個々のつながりの話となる。(本論文P17～P18参照) 今後は、具体的なテーマをしばり連携をしていくことを提案していく。

今後の展開について

- ・毎日の保育の充実から科学する心をテーマに迫っていく。
- ・子ども達の経験してきたことを、教科と結びつけて卒園後、小学校生活にて具体的な姿を検証していく。

(本論文P18参照)



のびのび、ゆくり、自由に、既に刺激を受けたが、おぼろげに感じているため、感謝しています。

大人にとっては当たり前ですが子ども達にとってはしっかりと受け止めて、安心して遊べる環境を整えていくことが大切だと感じています。

参観等の感想より…

子ども達が育てたひまわりトンネル 光をあびて

参考文献
 小学館図鑑NEO
 ひかりのくに図鑑・くらしと飼い方
 その他 論文内に掲載

富田林市立新堂幼稚園
 執筆者・研究代表 * 井上直美
 的場・平尾・西尾・岡田・勇川・大和